

〈その他（翻訳）〉

世界で最も美しい大通り

〔中国〕 蔣 方舟 著
姜 東星 訳

蔣方舟（JIANG Fangzhou）作家。1989年中国湖北省生まれ。清華大学卒業。現在、『新周刊』北京事務所副編集長。1997年より8歳で文学創作をはじめ、児童作家として社会の広範囲に討論を起こしている。著書に、『天窓を開ける』、『發育している』、『邪童正史』、『第一の女子学生』、『私はかつて世の変転を経験したことがないと思う』など。

この文章は蔣方舟氏が『新周刊』（2012.9）に掲載した「世界で最も美しい大通り」の一篇である。翻訳したものは、蔣方舟著『私はかつて世の変転を経験したことがないと思う』（広西師範大学出版社、2013）中の「紙上の大通り」である。

本稿は作家蔣方舟氏の散文「世界で最も美しい大通り」に惹きつけられ、翻訳したものである。文学の中の「大通り」が広く人々の目に触れ、感動を呼び、読む人の共有の記憶となる。銀座通り、シャンゼリゼ通り、ブロードウェイ（Broadway）など実際に行ってみたくなる大通りがいっぱいある。一方では「行ってみよう」という文学を読むと一人一人の心の中の「大通り」に行きたくなる。その小説の舞台になる場所を物語に沿って旅をする文学と旅の醍醐味を楽しむ「体験観光」の要素がある。

翻訳により文学の中の「大通り」という視点で「文学と観光」という研究テーマに着目する。私達が旅行する時、作家の見たものを見て、自ら経験する。そして文学を読む。旅行はもう一つの時空の人と対話し、歴史を越えて対話を促進するのである。時間の境を克服し、地縁と時空を超えて、人と人の理解と心の交流が生まれる。

「文学と観光」における文学と風景の融合により、文学の美、自然の美、伝統文化に息づく美学が観光と連動したと考えられる。「文学と観光」は地域への愛着と誇りが醸成される無形のものとなり、地域観光資源を新たな視点で表現、発信しているといえる。

この翻訳により「文学と観光」の研究のために、新しい構想を提供する。今後、文学の中の「大通り」に着眼し、身近な存在である城西国際大学の「カリヨン通り」、鴨川市嶺岡林道「桜並木の林道」を考察する。また、地域資源の魅力を「文学と観光」によって見える形にしていく取り組みも研究していきたい。

以下は「世界で最も美しい大通り」の全編である。

都市の血管

人は都市の中で生活し、体の影は鉄筋やセメントに多数の欠片を切断され、時間と視野が家の中に限られ、自分の生存環境を俯瞰する機会が減ったにない。もし歴史の縦が深い一枚の大きな地図を掲げれば、都市が国家の景観だけではなく文明の価値観であると見いだされる。

ロラン・バルトは『記号の国』ⁱでこう述べている。「西欧の都市の中心は常に充実したものとなっている。一個が目立っている場所、文明の価値が集中し凝縮した場所である。精神性（町の中心には教会がある）、権力（役所がある）、金銭（銀行がある）、商品（デパートがある）、言葉（カフェや歩行者天国の広場がある）」。「街の中心へ行くことは、社会の〈真理〉に出会うことである」とも語っている。

ところが、東京にあって、彼が見た都心はかえって中空だということである——城壁、堀、屋根、木は一つの風通しが悪い環状の領地をめぐって、「その中心自体はもはや消え去った概念にすぎなくなっているけれども、それでもなお中心が存在しているのは、何らかの権力を発するためではない。都市の動き全体に、中心の空虚さという支えを与えて、都市交通に限りない迂回を強いるためである。」ⁱⁱ

西洋の信条は人の力を信仰し、日本は空虚の中に神が宿ることを信じている。これで都心部への異なりをもたらしたのである。

再び中国を見てみよう。葛兆光氏は『宅兹中国』ⁱⁱⁱでこう示している。明朝地方誌図の中で特に強調しているのは、政治上の権力を代表する封建官吏役所、宗教の権力を代表する寺院、文化、経済の権力を代表する官官などである。これも中国古代のイデオロギーを代表したもの——権力の威厳を崇拜し、大きい「公」があるが、「個人」がいなくて、眼中に「人」がいない。民衆の個人の空間が士大夫の制作した地図の中で小さくて少しも重要ではない。

哲学者ソールズベリは都市を人の体にたとえる。彼は宮殿と大聖堂が都市の頭だと思い、都市の中心部の市場は胃、都市の手足は私有家屋だと考えている。人々は大聖堂の中でゆっくりと移動しなければならないが、それは、頭がゆっくりと思考をめぐらせるためである。市場の中で早々に移動しなくてはならない。なぜなら、胃の消化が早いためである。

ソールズベリの考えの延長線上にある都市の血管は自然と大通りであると察する。

動脈は広々としている大通りである。毎朝沸き立つ人々を都心部から移動させる。人々の流れが分かれ細くなり、みんな自分の落ち着き先で身を寄せる。静脈は狭い路地である。貧民窟、別荘、暗い地下室、明るいマンションなどから人々は出発し、合流し、都心部まで来る。巨大社会の永久機関の運行をスタートさせる。

18 世紀にヨーロッパの都市の設計者は近代的な医学の観点からインスピレーションを受けた。「もしも大量に移動すればものは壊死しない」という大通りを詳細に計画立て細かく分ける。

計画を立てる前に都市の血管は塞いだのである。社会学家リチャード・セネットは『石と

肉——西洋文明における身体と文明』^{iv}では中古期のパリをこう述べている。多くの家主は規則を違反し越境する建物を作るのである。それは自分の家を無限に広げ、大通りを非常に狭くさせる。建築物と建築物の間にただ一人しか通れないスペースが残ってくる。大通りは人々が権利と権力を主張する後で生まれた一つの空間であり、個人と公衆道徳の間にある微妙な境界線でもある。都市の設計者は私欲を制限し、道路を広げ、公共の利益のために考慮するものだが計算することが入り混じっている。例えば 19 世紀の都市設計は、都市の中での個人が大量に自由に移動することができるが、一方では団体を移動することができない、特にフランス大革命の時にあるような革命団体。パリ大通りは精密な計算を経る。幅は 2 台軍用車に並んで通させる。必要な時、大通りの両側に向って開戦することができる。

映像大通り

アリストテレスは『政治学』^vで「都市はいろいろな異なる人々から構成したのである。相似している人は都市に存在させることができない」と述べている。

都市は大きくて無名である。その中で生活する人は身分を思いのままに変えることができる。すべての人はお互いに見知らぬ人である。高くそびえている建物は人と人の距離を物理的に接近するのであるが、心理的距離はかつてなく疎遠になるのである。人々は各自のところに秘密のストーリーが発生している。それなのに、お互いのプライバシーはいつも暴露するリスクの中にある。

都市は「忘れる」ことをとても容易なことにしてしまったのである。もう愛し合うことがない恋人、会いたくない友達、かかわりたくない家族のメンバー、すべてが向きをひるがえして人の中に没入できる。自分でさえ自ら直面したくない時、都市の中に自分を放逐する。

ヴァルター・ベンヤミンはよく「迷宮」を使って都市を比喻する。彼は『ベルリンの幼年時代』でこう分析している。「都市の中で方向を弁別しないこと、これは何かを意味していない。しかし、都市の中で自分を見失うことは、森の中で見失った後のような訓練が必要である。こちらの見失う者に対して、街の通りの名前が森の中で枯れている枝の音のように軽快でなければならない。市の中心の路地は峡谷のようにはっきり照り映えるのである。私はこの芸術を習熟するのは非常に遅い。それはついに私の夢を満足させ、最初の痕跡は私がノートに紙上の迷宮を塗る夢想である。」

作家は夢遊者である。都市の迷宮は作家の最も良い遊園地である。普段、人は大通りの中で目的地に到着するために各種の交通機関を利用している。まっすぐに疾走し、窓の外を眺める目つきに焦点は定まらない。作家は歩くことが好きな人が多い。ショーウィンドー、店舗、半分閉じた扉と光を漂ってきた窓はすべて探る対象になった。散歩して足を止め、ぼんやりしてまた散歩する。目の前の景色は無数な情報のかけらのように変化し、作家は長い時間を放浪するように彷徨い歩き、探偵と同じく手がかりを追跡する。

書くための目的ではなくても街で散歩するのも良い。ゲーテは『イタリア紀行』^{vi}で散策することのすばらしさをこう述べている。「激しく沸き立ち絶え間ない押し寄せる人込みの中でゆらゆらすることは、珍しくて孤独な経験である。すべての人はこの中に流れ込んでいるが、各自は極力自分の道を探し出したい。人の群れの中でせわしく不安な雰囲気の中で私は初めて落ち着いていることを感じる。街がもっと騒がしければ私はもっと落ち着くことになる。」

作家が大通りを歩いた足跡は、都市遊覧する時に手がかりが多く隠れされている。そのため迷宮も一つ一つの指標であった。

アイルランドの首都はダブリンである。ここはベケット、バーナード・ショー、イエーツなどの大文豪が生まれた土地である。最も話題になるのが J・ジョイスである。アイルランド人は『ユリシーズ』の主人公ロバート・ブルームのために、「ロバート・ブルーム日」を創立した。『ダブリンの市民』^{vii}に現れた大通りも今もあった。アイリッシュパブ、マリガン、オニールバーなどなど。

アイルランド人はこのように J・ジョイスを大切にするのは、彼がダブリンの都市の物語を作ったからである。寂寥の大通りが自分の魂を見つけられた。慌ただしい通行人も自分に属する自叙伝を得た。

しかし、多少皮肉があったことは、J・ジョイスはとても早い時期にダブリンを離れた。大学を出た後、J・ジョイスはカトリック教を痛恨し当時動乱のダブリンを離れた。離れる時、彼は自分の記憶を打ち開き、十数篇の短編で構成する「ダブリンの人々」の生きざまを描いた。

彼は創作のきっかけを次のように述べている。(一) わが国（アイルランド）の精神史の一章を書いたつもりである。(二) ダブリンを舞台に選んだのは、この都会が麻痺の中核であると思うからだ。(三) 「少年期」「青春期」「成熟期」「社会生活」の四つの相を、この順序に従って提示した。(四) 大部分は、「細心な卑小の文体」による。^{viii}

J・ジョイスは冷酷に自己評価をしていることになったが、記憶はダブリンの都市に一層の愛情がこもっているベールをかぶっていた。数十年の困窮で放浪の身となつてかえって、彼を故郷にだんだん近づけた。成長していた少年時代の大通りを繰り返し描いている。

その少年時代の大通りは、作家の記憶を深めた想像力を非常に養った。無数な細かいことは予想外な時間に突然出現したようである。

同じく亡命作家のヨシフ・ブロツキーはレニングラードで生まれ育ったが、彼はこの貧乏くさい都市に対して好感をもっていない。不潔な居住区、ぼろぼろな道路と混乱する中庭、革命の炎がここに持ってきたのはただ壊れ果てる廃墟である。

しかし、ヨシフ・ブロツキーは少年時代によく歩いたことがある大通りを追憶する時、数回じっくり見た大通りをこのように思い出したのである。「これらのビルの円柱は壁の柱の上で神話の動物あるいは人物の塑像を飾っている。本当のことを言えば、私はこれらの彫刻から、ベランダを支えている女像柱や参道両側の壁龕から首がない、腕がない胸像から世界歴

史を学んだ。それは私達が教科書から学んだことより豊かである。ギリシア、ローマ、エジプトのすべてがここにある。それらは砲撃の最中もこれらの破片に耐え、戦禍を抜けた。それはバルト海の薄暗さや波がきらきらと輝き流れ込んでいる川、たまに疾駆したことがあった激流の中で奮起した曳船が、数学者とゼノンより無限とストア学問に関することを多く教えてくれた。」

作家ほど都市に対してよく知っている人がいない。

グスタフ・ヤノーホの『カフカとの対話』^{ix}ではこのように書いてある。「私はこの都市^{まち}のさまざまな建築物についてドクトル・カフカがじつに広い知識を持っていることに、しばしば驚かされたものである。彼は宮殿や教会のみならず、旧市街のずっと奥まった、^{ドウルヒハウス}通り抜けの家^{ドウルヒハウス}にまで明かった。……彼は私を連れて曲がりくねった横町を通り抜け、彼が〈光の痰壺〉と呼んでいる旧プラハ式の小さい、漏斗型の内庭に入ったり、古いカルル橋の近くで、パロックふうの玄関を通り、円いルネサンス回廊を巡らした猫の額ほどの中庭を横切り、暗い筒のようなトンネルを抜けて、小さな中庭にうずくまっている見るかげもない飲食店のところに出たりした」。^x

カフカは生前はプラハ城内黄金小路 22 番地に居住していた。毎日シロカー大通りのアルコカフェまで行って小説を書く。彼が目の中の現実にもとづいて、不条理なことを想像し、不条理なことが知らないうちに現実になった。

このことがミラノ・クンデラの『存在の耐えられない軽さ』^{xi}の中で起きた、同じ都市、同じ大通りかもしれない。「テレザは侵攻当時の日々を思い出していた。人々とはすべての町の街路からプレートを取りはずし、道路から標識を引き抜いた。一夜のうちに国は名無しになったのだ。7 日間、ロシア軍は自分たちがどこにいるのかわからないまま、国中を彷徨った。士官たちは占領するために新聞社、テレビ局、ラジオ局の建物を探し回ったが、見つけれなかった。彼らは人々を尋問したが、人びとは肩をすくめるか、間違った住所や間違った方角を教えた。」^{xii}

大通りはすべての名前を失い、この都市は突然一つの忘却された都市になった。

プラハは世界で時間に対する最も正確で敏感な都市であり、また、最も曖昧で混乱する都市である。この都市には二つの有名な時計がある。ひとつは旧市街広場の天文時計で、それは太陽や月の位置などを示すもの、バビロン時間、古チェコ時間と現代の時間を表わしている。

もう一つはユダヤ人市庁舎のヘブライ数字の時計で、その時計の針は反時計回りに動く。過ぎ去った時間のごとく、昔を追ってはいけなくなる。逆転する時計は昨日望んだことを再現できたが、永遠に何かを補うことが不可能である。もしもミラノ・クンデラがカフカの大通りを戻りにくくした場合、あれらがチェコの改革運動に取り除かれる記念碑やオーストリアの反改革運動、チェコスロバキア共和国や共産党に取り除かれるすべての記念碑の中から魂が抜け出てくる。それが、大通りに出沒し、忘却されてはいけなくなること気づかせてくれる。

大通りはただ記憶の中でこのように素敵に見える。日本の女性作家寿岳章子は『京都町なかの暮らし』^{xiii}で昔の京都のことを思い出している。彼女は京都人は簡単に興奮しない、集団行為をさせることが難しい。彼らはうなぎのように曲がる路地を通して入った家の中にいる。材質の良い木の窓から外を見て、ひそひそ声で話す云々。これは典型的な年寄りの反応で、何か見たことがない、何か聞いたこともない、何か経験したことがないことだろう。最も栄えた時から最も寂しい黄土までに、「昔、豊臣秀吉が病で最後に醍醐寺までに桜の春日の旅行に出る行列のようであり、絶世美人建礼門院徳子が一生寂光院の部屋で仏教を信仰し過ごされたようである。どんな華やかなことが京都人を誘惑できるのだろうか。どんな恐ろしい損失が京都人を驚かせるだろうか。」

すべての大通りは自分に属する魂がいる。小石の道ごとにその道の記憶を隠している。それぞれこの地に生まれ育った人々はその大通りの中から追憶を切り取って頭に残す。日がたつうちに、それは聞いている物語であるかそれとも自分の経験したことさえも忘れる。

一大通り一世界

イギリスの小説家グレアム・グリーンは『ハバナの男』の中でこう書いている。「人口研究報告は各種の数値を出して都市人口を統計することができる。それによって一都市を描くことができる。しかし、市内に住む人にとって都市はただ何本の大通り、何軒の家と何人かの人々で組合せたのである。これらがなくなったら、都市はなくなり、ただ悲しい記憶だけが残る。」

インドの作家 V. S. ナイポールにとって成長した少年時代の貧民窟——ミゲル・ストリートある。

当時オックスフォード大学の学位を取得したが、彼が困惑している時期である。突然あのストリートとそのストリートの人を思い出して初めて小説『ミゲル・ストリート』^{xiv}を書き出した。

毎朝起きると裏のベランダの手すりに腰かけて、「どうだい。ボガート？」とハットは大声で呼びかけた。するとボガートはベッドの上で寝返りを打ちながら、だれにも聞かれないように、「どうだい、ハット？」と静かに呟くのだった。

これは『ミゲル・ストリート』の第1篇「ボカート」である。全部は17篇の短編から構成されている。一篇ごとに一人の人物を描いて、そのすべてが敗者である。ミゲル・ストリートがスペイン港に隣接している。トリニダード・トバゴに属する。街の人々は故郷を逃げて居候になった人たちである。彼らは落ちぶれたインド式の生活をして、自己中心の閉鎖的な幻覚の中で生きている。ナイポールの話によると、「私たちは内心を見守り、他所で生きてい

る。外の世界は暗い形式で存在し、私たちが聞いても何も応えてもくれない」のである。

混んでどうしようもない雑居、野放図に成長する子ども、大通りは人から構成され、世界もただ人情だけからなる。多くの作家の創作の題材はただ小さな土地、例えばガブリエル・ガルシア・マルケスのマコンドとフォークナーの「切手のように小さな町」のようだ。

『ミゲル・ストリート』と同じような作品は米国作家シャーウッド・アンダーソンの『ウィンズバーグ・オハイオ』とメキシコ系女性作家サンドラ・シスネロスの『マンゴー大通り、時々さようなら』^{xv}があり、すべて一つの狭苦しい空間、一つのみなぎっている世界を物語っている。

少年は長年生活した都市を離れていつも興奮し、遠い旅に出る。体はだんだん軽くなって、後ろに見送る人の影はだんだん小さくなる。しかし、離れるのは帰って来るためである。追憶も一種の帰来である。『マンゴー大通り、時々さようなら』のひとつは、「わたしがあとに残してきた人たちの代わりだということが。出ていけない人たちの代わりなんだということが」である。^{xvi}

ホルヘ・ルイス・ボルヘスは晩年に次第に失明、しかし、彼はブエノスアイレスの街頭であてもなく彷徨い歩くのが好きである。日の出から日が沈むまで。初めの時、わずかに残す視力を使って空の色、雲の色、黄昏の色、雨の後の大通りの路面の色をしっかりと覚えるためである。それから書籍の文字は消えてなくなって、友達の顔は消えてなくなって、鏡の中ではすでに誰もいない。ものはすべてぼんやりしていて、彼も依然として歩き回るのが好きである。

彼は「通り」という詩の中で「私の魂はブエノスアイレスの通りだ／人の群れと交通で／強制する食欲な通りではなく／ひっそりと静かな街／習慣の力に隠れる空と平原の広がる深い中で／自分を見失い」と書いている。

世界があなたを離れて遠く去るが、大通りは永遠にその不思議さを失うことはないのである。

【訳者注】

ⁱ ロラン・バルト（2004）著作集7『記号の国』石川美子訳、みすず書房、51頁

ⁱⁱ 同上 53頁

ⁱⁱⁱ 葛兆光（2011）『宅兹中国：「中国」に関する歴史の建てなおしを論じる』中華書局

^{iv} リチャード・セネット（2016）理查德・桑内特《肉体与石头——西方文明中的身体与城市》上海訳文出版社

^v アリストテレス（1972）『政治学』田中美知太郎編、中央公論社

^{vi} ゲーテ（1942）『イタリア紀行』相良守峯訳、岩波書店

^{vii} ジェンムズ・ジョイス（1999）『ダブリンの市民』高松雄一訳、集英社

^{viii} 同上 404頁

- ix グスタフ・ヤノーホ（1994）『カフカとの対話』吉田仙太郎訳、ちくま学芸文庫
- x 同上 80 頁
- xi ミラノ・クンデラ（2008）『存在の耐えられない軽さ』西永良成訳、河出書房新社
- xii 同上 191 頁
- xiii 寿岳章子（2009）『京都町なかの暮らし』角川学芸出版
- xiv V. S. ナイポール（2005）『ミゲル・ストリート』小沢自然、小野正嗣訳、岩波書店
- xv サンドラ・シスネロス（1996）『マンゴー通り、ときどきさよなら』くぼたのぞみ訳、晶文社
- xvi 同上 164 頁